

推薦レポート

『無知』の受け手であること

永山愛望

はじめに、授業（二〇二三年度前期「日本文学史V-2（近代）」山口俊雄先生担当）で扱った作品のうち特に知的関心を喚起された三作を挙げる。

一作目は太宰治『十二月八日』、二作目は野坂昭如『火垂るの墓』、三作目は中島敦『マリヤン』である。本論ではこの三作品について、「無知」をキーワードに据えて論じる。

まず、『十二月八日』において「無知」に該当する部分は「私」の夫に地理的知識が不足している点、そしてラジオや新聞などの検閲された報道を通さなければ日本軍の戦況を知ることができない点である。

次に、『火垂るの墓』については、節子の幼さゆえの無知のほか、兄の清太についても、父親が海軍で上の階級だったことから、庶民の生活に気を回せるほどの知識や経験が不足しているという意味での無知が挙げられる。

また、『マリヤン』では、マリヤンの内面や心理状況に対する「私」の無知、マリヤン以外のパラオの島民たちがマリヤンほどの知識人ではないという点においての無知が描かれている。

上記の内容を分析していく中で、三作品に登場した「無知」は必ずしも同じものを指すわけではなく、複数の種類に分けられると推察した。

例えば、『十二月八日』の「私」の夫や『火垂るの墓』の節子、『マリヤン』のマリヤン以外のパラオの島民たちは、各作中で、該当する項目を学ぶというところまで高い意識を持っておらず、いわばその面で「既知」にあたる状態に対して完全にまっさらな「無知」である。

他方で、『火垂るの墓』において、裕福な環境に長く身を置いていたことが原因となり、庶民の生活に完全には溶け込めなかった清太の無知は、先述の「無知」とはまた別のものだといえる。清太の場合、他者からかけられたフィルターを通して世界を見ることに慣れてしまった、あるいはそこから世界を見ざるを得なかったがゆえに認識できないものがあった、いわゆる「死角」的意味を含有する「無知」と言えるのでは無いただろうか。

さらに、『十二月八日』で描かれていた報道の歪みによって真実が伝わらないことに依る無知のほか、『マリヤン』で、「私」がマリヤンの内面や心理描写をマリヤンの口から出た言葉で説明することなく、どこか己の状態を投影するような形で描いていたことから読み取れるマリヤンへの無知も上記とは異なるだろう。

『マリヤン』の「私」が被支配民をやや下に見ている点は、時代背景及び当時の倫理観を考慮すれば清太の無知にも似ているかもしれない。しかし、一方的に自身の姿を重ねながら、マリヤンを知った気になって案じていたことを踏まえるとどうだろう。報道が戦況の唯一の情報源であった民衆同様、自身の中では「既知」と分類されていたが実は無知だったという文脈があつてこそ「無知」にあたると考えられるのではないか。

本論では、以降、これら三つの無知のうち、一つ目を「純粹な無知」、二つ目を「死角的無知」、三つ目を「既知と誤認された無知」と定義する。さて、それぞれの「無知」は作品の受け手とどのような関係性を築き得るだろうか。

まず、戦争文学や支配被支配関係を描いた作品に触れる現代日本の読者にとって、「純粹な無知」は、作品に対し身近な印象を抱かせる要素となるだろう。たとえば、どこか憎めない夫の無邪気な部分、何も知らない幼気な少女が戦争に巻き込まれていく様への同情、マリヤンに対してモブキャラクター的役割を果たす島民への親近感などは、時代を越えて感情移入を引き起こさせる要因となりうる。しかし、それだけではなく、読者と同じ立場の存在が作品内に登場することによって、緊迫感や心強さのようなものを発生させることができるのではないだろうか。

現代の日本に限って述べれば、日本人の若者のほとんどは戦争を経験しておらず、支配被支配の関係についても、当事者意識を持っていない場合が少なくない。その点で読者は戦争や支配被支配に関して、「純粹な無知」を有する存在だといえる。もし、時代背景と一蹴してしまえばそれまでの不条理を前に、知識人が割り切つて生活を続けていくことを

賢い振る舞いとするような話であれば、若者世代の読者には本音と建前のギャップは伝わりにくく、また、理不尽な制約によって日常が変わつてしまうことへの危機感や喪失感も薄れてしまうことだろう。

物分かりのよい大人や我慢の出来る人間によって戦時中の生活が営まれていく中、そこに馴染みきれない純粹な存在が登場することが、当時を知らない読者との大切な架け橋になり得るのである。

一方で、「死角的無知」と「既知と誤認された無知」については作品に触れる我々が気をつけなくてはならない部分でもある。

例として、高畑勲監督『火垂るの墓』（一九八八年 スタジオジブリ）に登場する、清太と西宮に住む清太の親戚のおばさん（以降…西宮のおばさん）が、しばしばネット上で議論の的となっていることについて取り上げる。

『火垂るの墓』の地上波での放送は、二〇一八年四月十三日、『金曜日ドSHOW』（日本テレビ系）での高畑勲監督追悼放送が最後であった。

そして、放送後、「悲劇は清太の自業自得である」という見方がインターネット上で散見したことが、高畑勲監督の過去の発言内容と併せて同月二十二日の朝日新聞⁽¹⁾に掲載された。

以降も、同内容への小規模な意見交換はネット上で頻繁に見られていたが、再び大きな話題になったのは二〇二三年七月のことである。

X (旧 Twitter) 上で共感と呼んでいくつかの投稿の共通点は、幼少期と現在で清太と西宮のおばさんへの見方が変わった、という部分である。子どもの頃は清太に同情し、西宮のおばさんへ反感を持っていた人々が、どうやら今では、西宮のおばさんの言葉こそが正論で、清太の方に問題があると感じているというのだ。

しかし、それに対して反論する意見を述べた投稿もまた関心を集めており、中には先述の新聞記事と同様の高畑勲監督の言葉を引いたものもあった。

「もし再び時代が逆転したとしたら、果して私たちは、いま清太に持てるような心情を保ち続けられるでしょうか。全体主義に押し流されないで済むのでしょうか。清太になるどころか、未亡人以上に清太を指弾することにはならないでしょうか、ほくはそれがおそろしい気がします」

(2)

そもそも、前者のような意見が生まれる理由の一つには、平和教育によって作り出された戦争像が影響していると考えられる。戦争は苦しく、我慢の連続であったこと、上流階級出身の子どもは比較的恵まれた環境にあったことを学んだ大人たちにとって、『火垂るの墓』はどう見えただろうか。これまで聞かされてきた戦争の厳しさというフィルターが介されたことで、清太の未熟さに寄り添うという選択肢が薄れてしまったのではあるまいか。

その上、そのフィルターは回顧するときにも作用するのだからおそろしい。幼少期に自身が清太へ同情していた理由を、知識や教養が無かったためだと一蹴するような考え方は、清太だけでなく、過去の自身の戦争への向き合い方をも否定することになるのではないか。清太を簡単に指弾できてしまうことは、まさに「死角的無知」「既知と誤認された無知」双方の問題を内包していると言えよう。

ここまで、三種類の「無知」を通じてそれぞれの共通点、そして作品の受け手との関係性について分析してきた。前述の高畑監督の言葉を踏まえた上で、まともに移りたい。

今回取り上げた三作品のように、現実には限りなく近い設定で描かれたものにこそ、油断してしまうのかもしれないが、大前提として我々は作品に対して「無知」なのである。歴史的背景に基づいた「作品」に関しては、むしろ、知っている知識が多ければ多いほど、「無知」というスタートラインに立ち返るのが難しい場合もあるかもしれない。しかし、それでも、我々は自ら進んで「無知」を自覚していなければならぬ。

大切なのは、神の視点を時に放棄し、自身が無意識にフィルターをかけることで死角を生み出していないか、一部の知識を過大評価して現実を知った気になっていないか確認しながら、「純粋な無知」を意識して作品と向き合うことなのではないだろうか。

【参考文献・ツール】

・(1)「自己責任論『予言』した高畑監督」朝日新聞(二〇一八年四月二十二日 朝刊 二十九面)

・ Google Trends

『火垂るの墓』関連の語句を検索し、話題になった時期や内容の再確認を行った。

【引用文献】

・(2) 鈴木敏夫(編)『火垂るの墓』高畑勲88年の清太へ! 『アニメージュ』一九九八年五月号 徳間書店 四十七頁